

## 経済学と私

末川 博<sup>\*</sup>

大正3年(1914年)9月、私は、当時の京都帝国大学法科大学に入った。いっしょに入学したのは、およそ250名。そのころ法科大学は、法律学科と政経学科に分かれていたのであるが、今日の法学部と経済学部のように、学習する科目がそうハッキリ分かれていたわけではなくて、共通する科目が多かった。そこで、法律学科に入った私も、いくつかの経済に関する講義をきいたのであるが、その最初の講義は、田島錦治先生の経済原論であった。

先生の講義がどんな内容であったのか、すっかり忘れてしまったけれども、限界効用の話だけは、ゴッセンとかポエーム・バベルクとかいったような学者の名とともに頭の片隅に残っている。そして酒好きであった先生は、灘の生一本がどんな過程でどんなふうに通れるかを、いとも細かに、上着のソデをまくしあげハカマのスソをにぎって、手まね足まねで勢よく講壇の上を歩きながら話された。その光景は、極めて印象的であって、60年たった今日も、よく思い浮かべることができる。灘の酒造りが経済学とどのようにかかわり合っていたのかわからないが、あるいは先生の主観的な酒に対する価値が限界享楽均等の法則に従って客観化されるというようなことを教えられたのかも知れない。とにかく、そのころは酒の強い先生が多かったようである。

経済原論のほか、山本美越乃先生の植民政策や財部静治先生の統計学などの講義にも顔を出してみたけれども、法律学科では必須でなかったから、途中でやめてしまった。しかし小川郷太郎先生の財政学は、国家財政を中心に量出定入の原則に従う理論と政策について明快な話をせられたわかりやすい講義であり、とくに私は現実の政治にも関心を有していたので、欠かさず出席して聴いたのである。そして私はそのころ試験の最中でも毎朝起きると新聞をていねいに読むクセがあったのだが、先生の出された試験問題に「本年度の国家予算を論評せよ」というのがあったのを見たときには、占めたと思って何かかなり詳細な答案を書いたことを覚えている。小川先生は、その後政界に出て商工大臣を勤められたこともあり、太平洋戦争

---

\* すえかわ ひろし 立命館名誉総長

のさいには指導的な司政官として南方に赴かれ、終戦まぢかに帰国の途中で乗船が撃沈されて亡くなった。先生の人となりや生き方については、別に考えるところもあるが、とにかく私の聴いた経済学関係の講義のなかでは財政学の講義は出色だったとってよいように思う。

なお、小川先生に関しては次のような思い出がある。昭和8年(1933年)のいわゆる滝川事件、すなわち京大事件で教授7名その他が京都大学を去ったあと、ある会合で小川先生が「君たちは、理屈を通すことばかり考えて、手を打つことを知らぬからダメだ。ある時点では妥協しなければいけない」というように戒められたことがある。しかし、私は「もし私たちが政治家であるなら、おっしやる通りでしたでありましょう。だが、幸か不幸か、私たちは学究であり教育者であります。スジの通らないことで妥協したり、打算的に考えて手を打ったりすることは、許されぬ場合があります」と答えて、学問の研究や教育の場では、どんな力にも屈せずイバラの道を歩まねばならないことがあると思う私の信念を述べたのであった。別に先生にタテ突いた積りではないが、人間の生き方の違いがこのような発言をさせたのである。

ところで、60年近くも昔に、私が学生時代に学んだ経済学につながる思い出話をすれば、ザッと右のようなものであるけれども、がんらい私は法律学科の学生としては不出来な方であった。つまり、法律の勉強に専念するという善良な学生ではなくて、生来むら気の多い性格なので、他学科の学生にまじって天文台の望遠鏡のぞいたり医科の教室で解剖の実験を見たり哲学や美学の講義を聴いたりしたほか、政治や経済の書物を好んで読んだのである。そのために、法律の方の学業成績は優秀ではなくて、卒業後大学院の特別研究生となって勉強を続けたいと思ったのだが、成績が十分でないために研究室にのこる資格がなかった。

そんなことで、研究生活をあきらめて役人になることに決め、当時の農商務省の採用試験を受けたのであるが、そのとき京都大学の経済に偉い先生がおられることを知った。というのは、採否を決する面接のさい、吉野さんという秘書官が「君は京都大学の卒業か、それなら、戸田教授を知っているだろうが、あの先生の取引所に関する研究などは実に立派なもので、あんな論文の書ける人は東京にはいないよ」というようなことをいわれたのだが、実は、戸田海市教授の名前だけは知っていても、先生の研究については全然無知だったので、何とも答えようがなくて恥ずかしく思ったのである。もっとも、私は、在学中に高等文官試験に合格して行政官になる資格もっていたので、採用されることになったのである。ところが、任官の辞令をもらうこととなった2、3日前に京都大学の方から「こんどある篤志家からの寄付で私設の特別研究生を置くことになったから帰ってこないか」という旨の

うれしい通知を受けとった。そこで、さっそく農商務省の方はことわって、京都大学の大学院で研究生生活をするようになったのである。この間の経緯について語ればいろいろの回顧談もあるが、とにかく、大学に残って勉強を続けることができ、その後学究として生涯を送ることができたのは、私にとってはまことにあり難いことであつたと、いつも感謝している次第である。

ところで、右に一言した国家試験の高等文官試験（私の受けたのは行政科の試験）では、経済の試験に関して今でも覚えている面白いことがあつた。経済の口頭試験場にはいったら「有価証券の動員」と書いた紙片が受験生の机の上においてあつた。私が椅子に腰をおろすと、若い肉づきのよい元氣そうな試験委員の先生が「君、それを知っているだろうネ」と試問を始められた。見たことも聞いたこともない言葉なので「知りません」と答えると、「近ごろの新聞にはよく出ている言葉だが、君は、新聞を読んでいないのか」ときかされた。しかし「実は、急に受験することにしたので、この夏は1月ばかり山にこもって試験勉強をしていましたので、最近の新聞は読んでいません」というほかはなかつた。「それは困ったナア。それでは先ず有価証券とはどういうものか説明したまえ」という調子で、次には動員とは何か、それを有価証券に結びつけたらどういうことになるか、とだんだん押しつけてきかれるのだが、一向まとまった返事にはならない。試験委員は、面白そうにニヤニヤしながら、ちょうど第一次世界大戦のころなので、イギリスがアメリカから軍需品や生活物資を購入するについての資金関係のことなどを話しながら、ときどき「君はどう思うかね」ときかされる。私が貿易の帳尻や外貨輸送点のことなどで多少知っていることを説明しようとする、と、「そんなことは経済の常識だからよろしい」といった具合に私の発言は封じられてしまう。とうとうイギリスがアメリカから物資を買う代金の支払にあてるために、債権国たるイギリスにあるアメリカの公債や社債などを集めて、それをアメリカに送って決済をつける話をしてくれた上で、「こんなことが有価証券の動員ではないかネ」ときかされた。「そうですね」答とえると、「でしょうか、そうだとはいえないか」と迫られるので、「私は、さっきもいったように最近新聞も読んでいないので、でしよと答えるほかはありませぬ」と答えたら、ハハハと大笑いですんだ。だいたい口述試験は1人の割りあて時間が7分ないし10分ですむのだが、私のこの場合だけは35分もかかつた。

試験場を出たときには、全く狐につままれたような気持であつたが、このくらい徹底的にやられると、一種の快感をさえ覚えたのである。そして私をいじめた試験委員が誰であるかは、受験中は知らなかつたのだが、あとでそれは法制局の参事官馬場鎮一氏であると教えられた。私の受験の当日病気で休まれた東京大学の経済の教授にかわって代役をつとめられたのであつた。馬場さんは、後に大蔵大臣や内務

大臣を勤められて、政界でどんな役割を演じられたのか知らないが、受験生から見た若い試験官の馬場さんは、実に頭の回転が速くておそろしく鋭敏な人であったと今も思っている。そして後日当時試験委員であった織田万先生から「合否を決定する試験委員会で君の成績を見たら、経済の点はすばらしくよくて最高点で抜群だったよ」と聞かされて妙な気もしたが、また、私がまともな返事をするとはそれは常識だといって私の発言を封じた若い馬場試験官の眼光の鋭さにも敬服したのである。

前にも述べたように、私は、法律学科の学生でありながら、他の分野のことにも興味を感じていたのだが、同郷の関係からときどき河上肇の宅にも出かけて経済の話の聞き、セリグマンやタウンシグなどの著書を借りてきたこともある。どんな読み方をしてどの程度に理解することができたのか、スッカリ忘れてしまったが、とにかく、河上肇と河田嗣郎先生の宅には時折りお邪魔したものである。また京都大学で社会政策学会の講演会が開かれたさい、福田徳三先生の話聞いてその博学振りに驚いた記憶もある。

思い出すままに、経済学に関連のある回顧談を試みたのであるが、そのころはまだマルクスの名も私たちの耳に入ったことがなく、学生が「社会政策」と表紙に書いたノートを持っていると警官が怪んでとがめるといふ時代であったのだから、まことに隔世の感が深い。そして私が大学を卒業したのは、大正6年（1917年）7月のことであったが、その年の秋にはソビエト十月革命で地上最初の社会主義国家が出現、そして日本にも新しい風潮が流れて経済学にもやがて新風が吹くことになった。考えてみれば、私も、さまざまなことを見たり聞いたりしてきたものである。